

# 交流・連携とまちづくり

共通テーマを編む、そして始める!

東京工業大学工学部・立教大学観光学部 兼任講師 大下 茂 株式会社プランニングネットワーク代表

## はじめに

### 阪神優勝のシーンに重なる交流・連携の望ましい姿

去る9月15日、阪神タイガースが遂にセ・リーグを制覇し、18年ぶりの優勝を果たした。苦難の道のりの末、ようやく成し遂げた優勝。美酒に酔いしれ、歓喜の表情で乱れ狂う阪神ファンの姿は、阪神地区のみならず、日本全国、いや世界各地に見ることができた。18年ものあいだ苦杯を嘗めつづけてきた阪神ファンは、ようやくこの騒ぎを楽しむ特権を得たのだ。

しかしながら、この現象それ自体には、阪神ファンではない人にとっても大変有意義なヒントがある。何を隠そう、今回のテーマである『交流・連携とまちづくり』で論じたい「交流・連携による影響・効果」「交流・連携の要諦」等のポイントが、実はこの阪神優勝の場面に凝縮されているのである。

優勝を目前とした神宮球場、名古屋

ドームには、全国から多くのファンが駆けつけた。悲願達成を記憶にとどめようと、大阪から東京へ、東京から名古屋へ、そして名古屋から大阪へ、ファンにとってはめくるめく思いの1週間であったことだろう。この大移動は、本拠地甲子園球場の集客記録を塗り替えたばかりでなく、他球場にも絶大な集客効果をもたらした。いわば球場間の連携が活発化することで、多くの交流人口が惹き込まれたのである。この経済効果の大きさを、想像に難くない。

リーグ優勝によって、これほどまでに「交流人口の獲得」「地域の相互交流の活性化」が図られたのはなぜだろうか。それは、「悲願達成」という『明快な目標像』が設定されたことで、「虎キチ」という『共通性(共通テーマ)』がより強化され、「苦節18年(！)」という『限

定の論理』 すなわちくいまだけ(期間限定)><ここだけ(地域限定)><あなただけ(対象限定)>の論理が、その交流・連携の力をより大きなものへとスパイラル式に増幅させたものとみられる。

本稿の主題である交流・連携による地域づくりにとつても、この『明快な目標像』の効果は絶大である。しかしながら、複数の地域にまたがった共通テーマを見出そうとする試みは、しばしばどっちつかずの最大公約数的なものとなり、人を惹き付ける魅力を弱めるものとなりがちである。この課題をいかにして乗り越えるか。そして共通テーマはどのようにして浸透し共有されるのか。それが本稿のテーマである。

## 交流・連携のネタ探し～『観光立県・千葉』での地域交流空間づくりの試み

今年の4月に観光立国懇談会で<住んでよし、訪れてよしの国づくり>という総合的な戦略展開の方向性が打ち出された。また、それに先立つ平成14年度、千葉県と茨城県の一部地域において、「観光を活かした地域交流空間づくり」に向けての調査研究が試行された。筆者も参画したこの調査研究では、実にユニークな交流・連携の試みがなされた。千葉県内では、館山市を中心とする南部エリアと、佐倉市から佐原市・潮来市・鹿嶋市までの中部

エリアが研究対象のモデル地区となったが、本稿ではその中部エリアでの取組みの一部を紹介したい。

順天堂発祥の地・佐倉市、国際玄関口と成田山新勝寺で有名な成田市、「小江戸」として注目を集めつつある佐原市、水郷・潮来市、アントラーズの鹿嶋市等を擁する中部エリアは、首都圏マーケットに近接している(一部は含まれている)ことから日常的な集客が期待される地域である。しかしながら、首都圏近郊の住宅地としての需要が高ま

りつつこともあり、観光地としてのイメージはいまひとつ希薄なのが現状である。そこでこれら地域が交流・連携を強めることにより、集客に資する地域イメージや情報を束になって創出し、発信しようとする具体的な取組みを調査研究の目標の一つとした。その一歩として、「地域資源(宝)の発掘・再発見からはじめる」「交流・連携による地域づくりへの関心を高める」「身近な交流・連携からはじめる」という3つの地域づくりの姿勢から『交流・連携による



地域づくりの実現』に向けての取組みが始められた。

調査研究では、まず、これまで集客効果があまり期待されていなかった素材(集客のネタ)を探しだすことから始めた。マーケットの動向(ニーズやウォンツ)と照合しつつ、地域内を隈なく巡り歩いた中から集客素材の原石を見出す作業に力を注いだのである。その結果、「祭り・祭礼」「地域の履歴・都市の成立ち・歴史」「蔵元」「クラインガルテン(都市近郊農業)」等といった共通性のあるテーマと巡りあうことができた。

共通性とは何か。たとえば、祭りはそれぞれの地域に固有なもの(佐原の大祭、潮来祇園祭等)だが「祭り」というテーマ自体は様々な地域に共通してい

る。そのちょっとした違いが共通テーマのもとに束ねられることで、統一的なイメージの発信が強まる一方、市町村ごとの個性を発揮することもできる。集客のための商品づくりという観点から筆者が立てた仮説は、同種の素材でありながら加工法や賞味法(アピール法)にバリエーションを持たせることで、共通テーマの下、『交流・連携による地域づくり』に奥行き感のある魅力をもたらすことができるというものであった。

先行する地域イメージとは異なる横顔が浮き彫りにされた市町村、あるいはこれまでこれといった地域イメージをもたなかった市町村にとって、共通性のあるテーマの下に地域資源を再編集する(光の当て方を変える)ことは、地域

間交流・連携の活発化のみならず、地域の個性を再認識・再アピールする絶好のチャンスともなるのである。



水郷三都では、7月の佐原の大祭を皮切りに、8月に潮来の祇園祭、9月に鹿嶋の神幸祭、そして10月に佐原の秋の大祭が開催される。「祭礼」という統一テーマが束となって地域をアピールする。そして訪れた人々は、この統一テーマを堪能するとともに、その中にちょっとした違いを見出すことに面白さを感じる。その違いが地域個性・伝統なのである。

## 「技」を編み出す～佐原市の取組み

先に触れた東関東中部エリアの「観光を活かした地域交流空間づくり」に取組むうちに、佐原市・潮来市・鹿嶋市・成田市・佐倉市で広域的に交流・連携しようという動きが生まれた。その牽引役として名乗りを挙げたのが佐原市である。

佐原市では、中心市街地活性化基本計画に続き、平成14年3月にTMO計画を策定し、観光と商業の両面からまちづくりに取組んでいる。同年、市や商工会議所が母体となって設立された「株式会社ぶれきめら」は、情緒あふれる小野川の舟運事業を進めるなど、伝統的建造物による美しい町並みを生かしたまちづくりを担う主体として期待される。また、伝建指定を受けるにあたって重要な役割を担った「小野川と佐原

の町並みを考える会」や、観光客をもてなす「町並み案内ボランティアの会」など、まちづくりを進めていく活力は市民のあいだからも生まれている。先に挙げた5市の広域連携の音頭を取るにふさわしい市である。

しかしながら、佐原市の地域イメージは今ひとつ統一性が弱いとも感じられる。伝統的な町並みによる「小江戸」、カンヌ映画祭でグランプリをとった『うなぎ』の舞台となった「水郷」、さらには「伊能忠敬」や「香取神宮」など、素材が多様であるがためにかえってアピール力が拡散されてしまうという。他の地域から見れば贅沢とも思える悩みがあるのだ。

そこで、佐原に眠る地域資源の発掘にあたり、広域的な交流・連携まで見据えた共通性のあるテーマの下に、地

域内外の素材を再編集することにした。そこで見出されたテーマが、ずばり技である。

「小江戸」と「水郷」と「伊能忠敬」と「香取神宮」と、この技によって共通性のあるものとして再認識することができる。たとえば「水郷」と「自然のなせる技(業)」としてみる。単なるこじつけではない。「水郷」という技は、長い年月をかけてこの地域に住む人々の生活に根ざし、風土をかたちづけてきた。その生活や風土の上に、人々は建物をつくり、祭りや工芸品などの伝統を受け継ぎ、由緒ある神宮や古木に祈りを捧げてきた。こうした地域に根ざすものの総体が技であり、それぞれの技を、匠が育み、磨き、守っていくのである。また、このテーマによって、佐原は次第にブランドイメージを獲得し、<いまだけ><ここだけ><あなただけ>が技に触れているという感覚を来訪者に提供できるようになるだろう。

このように佐原のイメージにある種の統一感を与える技だが、決して各素材を縛り付けるものではなく、地域を越えて他の様々な素材とのつながりを自由に見出していく可能性を有している。個々の素材の自由な動きの成果がフィードバックされることで、技はより洗練されていくのである。



佐原市中心市街地を流れる小野川。情緒溢れる伝統的な町並みを舟がゆく。年に二回の大祭時のみの運航だった観光舟運を日常的に運営するという事業に「株式会社ぶれきめら」が取組んでいる。右は大阪道頓堀。沿川の雰囲気は異なるが「見る・見られる」関係が舟運の魅力である。





## 地域サミットブームが残したもの、残さなかったもの

言うまでもなく、まちづくりにおいて交流・連携を実現することは難しい。

時は遡り、昭和50年代半ばから60年代にかけて、地域サミットと呼ばれる集まりが雨後の筍のように全国各地でポコポコと沸き起こった。同名の市町村があつまった「全国東洋町サミット」、歴史的人物の縁をつないだ「信長サミット」、果ては、鉄道も国道もない地域が参集する「ないないサミット」など、一連のサミット創生ブームは、まちづくりに地域外の視点を持ち込むよいきっかけとなった。姉妹都市縁組などと並び、広域での交流・連携の源流のひとつとも言える。

しかし、あれから四半世紀が経った

現在、これらのサミットがきっかけとなって具体的な事業展開が図られたという事例は残念ながらほとんど見られない。それぞれの市町村の特産を持ち寄ってソーセージ(「創生味」)を共同で製造・販売した「全国池田サミット」、地域をアピールするためのテーマソングを吉田拓郎さんをお願いした「全国吉田サミット」等、ごく一部の地域でしか目立った取組みは報じられていない。おそらく、その後の戦国時代、他より少しでも優れた個性をアピールして客を奪い取るという流れの前に、広域での交流・連携の芽は無残にも摘み取られてしまったのだろう。

そして新しい世紀を迎えた今、まちづ

くりは競争から共存共栄へと舵をとり直しつつある。長引く不況や人口増加の頭打ちという現実を前にして、共に手をつないで共存共栄を図る術を講じるよりほかに生き残る道はないとようやく各地域が真剣に考え始めたのである。

この生き残りの道をただの絵空事で終わらせないためにも、かつてのサミットブームの失敗を繰り返してはならない。我々に今求められているのは、「連携」や「ネットワーク」という言葉を空虚に繰り返すことではなく、具体的な取組みを始めること、そしてそれを一步一步着実に広げていくことである。具体的な行動に踏み出す勇氣があるかどうか、それこそが今問われている。

## 「この指止まれ!」民間の力を生かす

行動することが大事とはいえ、諸計画が錯綜し、また取組みの主体も様々である広域的な地域づくりでは、各方面の調整がつかず、事業がなかなか進まないというケースがある。行政区分や担当部署の垣根を越えるため、責任の所在も明確にならず、どうしても「相手の出方待ち」になってしまいがちである。

そこで期待されるのは、フットワークが軽く、自由にネットワークを広げていく民間の活力である。必ずしも地域内の企業やNPOだけにこだわる必要はない。外からの風が入ってくることで、地域のネットワークが活性化されることもある。少なくとも動きの軽やかさという点では、行政は民間企業やNPOにとても敵わない。そして、「それならそれでいい」のであり、苦手なことは得意な人に任せてしまえばいいのだ。もちろん、制度面でのサポートについては行政のほうが得意である。また、企業やNPO、商工会議所や委員会、あるいは個人商店など、それぞれの自由な動きをゆるやかに見守り、的確にサポートするという大事な役目も担っている。民間から新たな地域づくりの主体が登場しつつある今、行政の役割を再確認することが肝要である。

活力の泉は自由の中にある。行政や

市民、企業やNPO、さらには地域の壁をも越え、連携を具体的につくっていくこと。各主体が自由に動ける舞台を用意すること。それが、人口増がもはや見込めないこの時代において交流人口をうまく巻き込み、集客による地域活性化を果たすにあたっての有効な処方箋である。まとまらない意見の調整に四苦八苦するのは、動き始めてからでいい。まずは動くこと。そこからすべては始まる。

佐原にも、広域での交流・連携の推

進を担う中核となる組織ないしネットワークが近々生まれるであろう。その中核的推進組織は、技 という名の指を突き出す。動きが面白いと思った人や組織や地域は、その指に止まればいい — それぞれのやり方・関わり方の範囲内で。技 はその指に止まった人々の手によって磨き上げられ、継承され、地域内外にファンを獲得していくのである。



佐原市の伝統建築物の一つである三菱館は観光案内拠点であるとともに、まちづくり活動の拠点となっている。ある日、千葉市内の小学生が総合学習の授業で当地を訪れ、熱心に勉強していた。